

学校名	熊本県立東稜高等学校
-----	------------

活動のテーマ	生徒自らが行う防災教育の永続的システム作り
主な教科領域等	教科領域（国語、数学、英語、地歴公民、理科、体育、家庭、情報、特別活動）
活動に参加した児童生徒数	全学年約1080人
活動に携わった教員数	85人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	55人 【保護者・地域住民・その他（関係機関）】
実践期間	平成29年4月1日 ～ 平成30年3月31日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（ミサイル発射対応）

#### 活動報告

##### 1) 活動の目的・ねらい

14年後には、熊本地震後に生まれた震災を知らない生徒が入学してくる。また県内でも被災状況の濃淡に伴い防災意識にも温度差が大きい。さらに「熊本の次はまた熊本」の可能性も高く、防災教育は喫緊の課題である。また本校生は全国に進学していくため「東稜高校は内陸部に有り津波は関係ない」という意識ではなく、総合的な防災リテラシーを身につけさせる必要がある。

一方学校は、震災の為1ヶ月間授業の中断を余儀なくされ、学力保障のための授業時数の確保、生徒の心のケアのための担任の時間確保が最優先されるべき状況にある。また学校には、性教育、キャリア教育、主権者教育など〇〇教育と名のつくものが数多くあり、授業時数確保に苦慮している。以上の実態を踏まえて、活動のテーマを上記のとおり設定し、防災教育をブームや一過性のものにさせないために、日常の教育活動に溶かし込むことを活動の目的とした。新しいことに極力手を広げず、今あるものを防災の視点から見直し、生徒に出来る事は生徒にさせながら、自主性、責任感、行動力の育成を図り、担任負担を減らし、授業時数削減をしない、どの学校でも、誰が担当者でもできる持続可能なシステムとプログラムの開発をねらいとした。

##### 2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

実践は、学校防災教育年間計画に従って行った。（別添資料1）教科内容を防災の視点から見直し各教科の授業の中で行うものと特別活動の時間を使って行う防災教育（I）～（IV）と防災をテーマにした小論文コンクール、防災グッズアイデアコンテスト、P1チャレンジなど行事として行うものの3分野から構成した。

##### 3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会の学びの中から実践に生かしたことは、次の3点である。階上小学校、中学校の訪問の中で最先端の防災教育を見せていただき、児童・生徒は高い防災リテラシーを身に付けていることを実感した。熊本でも今後小中学校で、高い防災リテラシーを身に付けた生徒が入学してくることが予想される。高校としてそれらをさらに深めるようなプログラムの開発を心掛けた。また研修全体をとおして、人と人との繋がりが人の心と体を救うことを学ばせて頂きハード面とソフト面のバランスを心掛けた。例年、校内での避難訓練が主な実践であったが、本年は訓練に加えて教育の実践も導入した。学校一斉指導を変更し、3か年計画で原則学年毎のプログラムとした。また助成金の活用で、Face to face の他校を訪問しての交流が可能となり、防災教育の核となる生徒防災委員の育成が出来た。

##### 4) 実践の成果

###### ①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災教育・防災管理に関して、昨年度の1事業から本年度21事業に事業数を大幅に増やしたが、短縮授業1日と3時間のLHRとでほとんどの事業の企画、運営を担当者と生徒防災委員で行うことが出来た。学校評価アンケートの結果の分析の防災教育に対する満足度の問いでは、生徒は、よくあてはまる56%、当てはまる40%で、ネガティブな回答である当てはまらない、全く当てはまらないを合わせても4%であるのに対して、職員は「防災教育に積極的に取り組んだ」では、よく当てはまる28%、当てはまる54%で、ネガティブな回答が18%と、生徒の4倍強となった。活動量は満足度を高めるための重要なファクターであるから、保護者の回答結果が、生徒と職員の間の結果であったことと合

わせて考えると、本年度の防災教育は、少なくとも、生徒主体の活動が多い実践であったといえる。防災教育と授業時数の確保・生徒主体の活動が両立できて、防災教育の日常化と継続に寄与できるプログラムに近づいたと思われる。しかし地域防災の要である職員の防災意識と防災リテラシーの向上が今後の課題ともいえる。

### ②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

専門家による講義と実習により基本的な防災リテラシーが獲得された。また地域住民、関係機関、保護者、学校運営協議会委員の協力を得て行った避難訓練・防災訓練の各学年のアンケート結果を分析すると、全学年で「防災について家庭でも話題にしたい」「何らかの備えを考えたい」と大多数が答えており防災教育の成果が家庭にも波及したと言える。2年生では、「防災通信を公民館に貼りたい」などのアイデアが寄せられ、約25%の生徒が「今回の避難所開設支援訓練で学んだことなどを活かして、地域のボランティアに取り組みたい」と回答している。地域を巻き込んだ避難訓練、防災訓練の Face to face のコミュニケーションが、地域と生徒の距離を縮めた。また知識や技能を身に付けたことがボランティアへのハードルを下げた。今後学校としてボランティアを推進していかなければならない。逆に言えば我々がそのような機会を与えてこなかった。反省点である。学校評価アンケート（別添資料8）のボランティアに対する満足度に関する問いの回答から、「ボランティアを積極的に行っている」という問いに、よく当てはまる、当てはまると回答している生徒が、31%にとどまっているのに対して、職員は「ボランティアを積極的に推進している」の問いにポジティブな回答が、74%で2倍強となっており、生徒と職員の意識のずれが大きい事がわかる。これは教職員の認識の甘さに起因している部分も大きいと考えられ、職員の意識改革のための社会性、社交性の養成やボランティアをコーディネート出来る教員の育成が課題として浮上した。すなわちボランティア推進は、生徒の問題でなく指導者側の問題である。この問題点が洗い出せたことも大きな成果であった。労働力提供型でなく課題解決型のボランティアの推進を目指す。

また、小論文コンクールでは、防災意識を検証することで日常生活の意識を検証することも出来た。非日常を考えることで日常生活が改善される、防災教育の他の教育活動への波及効果が確認された。特に3年生では、この傾向が強かった。防災グッズアイデアコンテストでは、日常を防災の視点から考えるきっかけを与えた。この取組から将来商品化出来るものが生まれ、その収入で防災教育の活動資金が得られれば幸いである。防災通信は、家庭の防災意識の高揚に繋がった。P1 チャレンジも、意識向上の有力な手段となり得ることが確認できた。

葛藤事例を用いた思考実験型討論授業では、解なき葛藤状態の中で、様々な価値観、道徳観をぶつけ合いながら議論を重ねたことで、思考力、判断力、表現力の育成や多様性の許容力を高める効果があった。

### ③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本年度から熊本県は、全ての県立学校を防災型コミュニティースクールに指定して、学校運営協議会を設置して、新設の防災主任を中心に地域と連携した防災管理に取り組んでいる。東稜高校のある山ノ内地区はベッドタウンである。人口約9700人、うち高齢者2000名、うち要介護者400名、昼間の発災の場合、現役世代のほとんどは町外に働きに出ており、東稜高校約1200人は貴重なマンパワーである。地域連携の中でこの事実や地域の東稜高校に対する期待が分かったことは成果の一つであった。また逆に東稜高校を地域に知って頂いたことや地域や行政の声を防災マニュアルなど防災管理に生かしたことは意義深く、「防災行政に関する高校生の意見を頂きたい」という声も上がり、取組に双方向性が出てきた。人と人との繋がりが出来たことが最大の成果である。保護者からも期待以上の満足度を得た。

### 5) 自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

生徒自らが防災教育を行うために、核となる人材育成を行ったことが工夫した点である。具体的には、生徒会の中に、生徒防災委員会を新たに設置して生徒防災委員を中心に様々な活動を行った。クロスロードゲームやHUG研修は、生徒防災委員が中心となって授業を進めた。また防災通信の発行)、京都府立東稜高校、宮城県多賀城高校、大阪府立三国丘高校との生徒交流、NPO 団体の主催するHABATAKI 東北×熊本 ～復興の輪プロジェクト～への参加や兵庫県「人と未来防災センター」での研修をとおして、生徒防災委員が自ら知見を広め、それを生徒や家庭に対して、防災通信や防災教育、文化祭などあらゆる機会を利用して、広めることが出来た。また地域の祭りにも参加し、防災に関するブースを開き、得られた知見を地域にも発信した。理数コース、国際コースも特色を活かした取組が出来た。

## 6) 実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

人と人との繋がりを作ることが防災教育では大切であるということが実践から得られた教訓である。多くの外部の方々の献身的なご協力に助けられた。感謝の一年であった。

課題については、小中学校で身につけた防災リテラシーを深化させるプログラムの開発である。小論文コンクールでも、防災意識の高まりなど一定の効果が得られたが、日本人がなぜ共助に強いのか、絆や無常観など日本人の心の原点に迫る深い考察が出来る洞察力や思考力の養成がさらに求められる。また段ボールベッド作成実習においては、ベッド周りの仕切り壁をどの位の高さにするのが適当であるか、プライバシー保護と避難所の安全管理の観点から考えさせるなど、訓練に教育の要素を取り入れる視点を持って、思考力、判断力、表現力を養成できるように、個々のプログラムの改善が求められる。進学校であるからには、学力向上に寄与できる防災教育プログラムを目指したい。またプログラムによっては、広範囲から生徒が通学してくるという高校ならではの事情から工夫すべき点や限界も見えてきた。活動資金の確保や防災管理と防災教育の担当者を分けて互いの質を高めるなどの課題がある

## 7) その他

防災教育は命の教育である。だから理想論ではなく現実論で考えなければならない。ましてやきれいな事は通用しない。生徒も否応なしに、命や現実と向き合い、また自分と向き合うことになる。このことが生徒を成長させ大人にした。また防災教育は人と人との繋がりを作る。さらに防災教育が進路選択の切っ掛けとなり、進学に結びついた生徒が出たことは、進学校における防災教育実践の成果として小さくない。今後も防災教育の可能性を探っていきたい。

今年度の実践活動は、教員研修で得られた知見がベースとなっている。このような示唆に富む、貴重な学びの機会を与えて頂いたユネスコ協会様やアクサ生命様をはじめ、多くの方々に心より感謝申し上げます。今年度得られた全国の学校・関係機関との良いご縁を大切にして、防災教育を持続発展させたい。

## 平成29年度熊本県立東稜高等学校 学校防災年間計画

月	防災教育		防災管理	組織活動
	教科	特別活動	関連行事	
4	<p>■数学・数学Ⅱ(2年) 指数対数関数において地震の大きさを示すマグニチュードの計算に利用されることを知る</p> <p>■地歴公民・日本史A(2年) 安政地震について知る</p> <p>■地歴公民・地理A(2年) 火山活動と災害で地震災害について学ぶ</p>	<p>■防災に関する科学研究(理数コース)(4/18)</p>	<p>■生徒防災集会(来年度より)(4/16)</p> <p>■第1回防災主任研修(4/27)</p>	
5	<p>■情報・社会と情報(1年) 情報モラル・震災時の情報収集でSNSが果たした役割を学ぶ。また昨年の動物騒動をもとに、情報の見極め方を学ぶ。</p> <p>■数学・数学Ⅰ(1年) 2次関数・情報を得るためにパラボラアンテナに放物線を利用していることを示す。</p> <p>■地歴公民・政治経済(3年) 財政、補正予算で災害対応予算を知る</p> <p>■地歴公民・地理A(2年) 地形と災害で崖崩れと洪水対策について学ぶ</p>	<p>■生徒議会(生徒防災委員会設立のための生徒会規約改正)(5/25)</p>	<p>■生徒防災委員会設置(5/25)</p>	
6	<p>■理科・地学(3年) 地震と災害について学ぶ</p> <p>■数学・数学B(2年) ベクトル・力を表すのに有向線分が利用され風向きなどに使われていることを知る。</p> <p>■地歴公民・地理A(2年) 熱帯低気圧と災害について学ぶ</p> <p>■国語・国語総合 『羅生門』を取り扱う中で、災害時の心理について考える。</p>	<p>■生徒防災委員会(6/12)</p>	<p>■防災通信発行(6/20)</p> <p>■第1回安全教育事業推進会議(6/23)</p> <p>■第1回学校運営協議会(6/29)</p>	
7	<p>■理科・地学(3年) 地震と災害について学ぶ</p> <p>■数学・数学A(1年) 場合の数・確率・降水確率など確率の意味を知る</p> <p>■地歴公民・日本史B(3年) 明暦の大火について学ぶ</p> <p>■地歴公民・地理B(3年) 村落の立地と災害対策について学ぶ</p>	<p>■防災教育Ⅰ(LHR)(7/6) 1年 防災における心構えと基礎知識 2年 AED・救急救命研修 3年 避難所運営シミュレーションゲーム</p> <p>■防災に関する小論文コンクール(3年)(7/20)</p>	<p>■防災通信発行(7/4)</p> <p>■避難訓練Ⅰ(7/6)</p> <p>■オープンスクール(防災教育)(7/6)</p> <p>■職員研修(本校の防災教育、防災の基礎知識)(7/10)</p> <p>■防災通信発行(7/14)</p> <p>■校内安全点検(7/14)</p> <p>■先進地視察(兵庫)(7/26-28)</p>	
8		<p>■東北×熊本 復興P HABATAKI 参加(8/3-8)</p> <p>■地震火山子どもサマースクールIN益城町(8/9)</p> <p>■HUG研修参加(8/22)</p> <p>■多賀城高校との交流(8/24-25)</p> <p>■生徒防災委員会(8/29)</p>	<p>■第2回防災主任研修(8/9)</p> <p>■校内安全点検(校外点検・学校安全アドバイザーとの打ち合わせ)(8/23)</p> <p>■岡山玉野光南高等学校訪問(8/29)</p> <p>■第2回学校運営協議会(8/30)</p> <p>■防災通信発行(8/31)</p>	
9	<p>■地歴公民・日本史A(2年) 関東大震災について学ぶ</p> <p>■地歴公民・日本史B(3年) 島原大変肥後迷惑について学ぶ</p>	<p>■文化祭発表(9/8)</p> <p>■京都東稜高校との交流(9/15)</p> <p>■人と防災・未来センター研</p>	<p>■防災通信発行(9/5,9/22,9/26,9/29)</p> <p>■職員研修(安全マップ)(9/11)</p> <p>■アクサユネスコ東北教員研修(9/18-20)</p>	

	<p>■地歴公民・現代社会(1年) 地方自治について学ぶ</p>	<p>修(9/16) ■安全マップ作成 (9/25) ■防災教育Ⅱ(LHR)(9/26) 防災の専門家による講演会</p>	<p>■オープンスクール(防災教育講演会)(9/26) ■避難訓練Ⅱ(9/26) ■第2回安全教育事業推進会議(9/26) ■多賀城高校学校訪問(9/28)</p>
10	<p>■英語・英語表現Ⅱ(2年) 「L.12 ボランティア活動」:震災時を含めたボランティア活動体験や感想を表現させる。 ■家庭・家庭総合(1年) 被服分野、燃えにくい素材について学ぶ</p>	<p>■大阪府立三国丘高校との交流会(10/2) ■防災に関する小論文コンクール(2年)(10/6) ■防災アイデアグッズコンテスト(10/6) ■生徒防災委員会(10/30)</p>	<p>■SPS 視察(10/3-5) ■校内安全点検(10/13) ■防災教育(Ⅲ)学校安全アドバイザーとの事前打合せ(10/23) ■ ■防災教育(Ⅲ)区役所との事前打ち合わせ会(10/24) ■緊急地震速報受信システム設置(10/27) ■防災通信発行(10/30) ■防災教育(Ⅲ)消防署との事前打合せ(10/31)</p>
11	<p>■数学・数学A(1年) データの分析において過去のデータが蓄積され、未来予測等に利用されていることを知る ■家庭・家庭総合(1年) 食生活分野において、保存食、非常食・レトルト食品について学ぶ</p>	<p>■生徒防災委員会(11/13) ■防災教育Ⅲ(LHR)(11/16) 1年 消防火訓練 2年 避難所開設支援訓練 3年 HUG研修 ■東区民祭り参加(11/26)</p>	<p>■P1チャレンジモニターテスト(11/14) ■防災訓練・避難訓練Ⅲ(11/16) ■オープンスクール(防災教育)(11/16) ■第3回学校運営協議会(11/16) ■防災通信発行(11/8,11/14,11/20,11/24,11/27,11/28) ■防災道徳授業研究(静岡大学他訪問)(11/28-30)</p>
12	<p>■数学・数学Ⅲ(3年) 2次曲線において情報を得るためのパラボラアンテナなどに放物線が利用されていることを知る ■家庭・家庭総合(1年) 米の話α化米について学ぶ(非常食)</p>	<p>■防災マニュアル翻訳開始(国際コース)(12/2)</p>	<p>■防災教育小中高連携研究(北九州市教育委員会、東筑高校訪問)(12/5) ■第3回安全教育事業推進会議(12/12) ■第4回学校運営協議会(12/15) ■第3回防災主任研修(12/26)</p>
1	<p>■情報・社会と情報(1年) 情報システム・GISを使った震災被害の想定把握について学ぶ</p>	<p>■防災教育Ⅳ(1/23) ■生徒防災委員会(1/29)</p>	<p>■防災通信発行 (1/17) ■京都府議会学校訪問(1/24) ■宮城県教育委員会学校訪問(1/26)</p>
2			<p>■安全教育事業成果報告会(2/2) ■第5回学校運営協議会(2/8) ■校内安全点検(2/19) ■アクサユネスコ減災P 報告会(2/23)</p>
3	<p>■理科地学(2年) 気象と災害について学ぶ ■家庭・家庭総合(1年) 住居分において間取り、耐震構造について学ぶ</p>	<p>■東日本大震災メモリアル day2017 研修参加(3/3-4)</p>	<p>■防災通信発行(3/6)</p>